

## O14-082

## 看護基礎教育における「医療的ケア児」に関する教科書の比較

藤本奈緒子、樋口由貴子、永野 英美

西南女学院大学 保健福祉学部 看護学科

## 【目的】

現在、医療的ケア児は増加傾向にあり、地域支援体制の整備が進められている。それを支える看護師の育成は急務と言われる一方で、看護基礎教育について研究されているものは少ない。看護師になる前の基礎教育で、社会の現状を知り、医療的ケア児への看護について学び、興味を持つことは、将来、医療的ケア児に関わる看護師の育成に繋がるのではないかと考えた。そこで、医療的ケア児に関する看護基礎教育の教育内容を検討する資料を得る目的で、教科書の記述内容を比較し考察した。

## 【方法】

国内で教科書として採用されている5社の最新版小児看護学の教科書13冊を研究対象に選択した。教科書全てのページを精読し、「医療的ケア児」及び「医療的ケア」の用語を抽出し、記述量と記述内容について比較した。複数の研究者間で繰り返し検討し、妥当性の担保に努めた。

## 【結果】

最新版の発行年は、2022～2024年であった。記述量は、総ページ数における「医療的ケア児」及び「医療的ケア」の用語が記述されているページ数の割合で算出し、0～9.4%であり、13冊中2冊には、記述が無かった。記述内容は、9つのカテゴリーに分類した。9項目全ての記載があるのは、3冊であった一方で、2項目のみが2冊であった。【社会的背景】の内容は、11冊全てに記述があった。【具体的看護】は10冊、【関連する法律・制度】は8冊、【医療的ケア児の特徴】【社会資源】【多職種連携】【課題】は7冊、【家族の特徴】【看護の役割】は6冊であった。

## 【考察】

【社会的背景】は全てに記述されており、【関連する法律・制度】と【課題】についても、多くの教科書で書かれていた。このことから、医療的ケア児の増加の背景と、それに伴う地域支援体制の問題を捉えることが、看護の基礎知識として必要とされていると考える。初学者が【医療的ケア児の特徴】や【家族の特徴】を理解し、【社会資源】の活用と【多職種連携】の必要性、さらには【看護の役割】や【具体的看護】について学ぶことは重要である。しかし、教科書間で記述内容量には差があり、各教育機関で採用する教科書により、教育内容の差が生じることが推察される。看護基礎教育では、教科書を活用しながら、個々の教員の工夫により授業が展開されている。今後、医療的ケア児を支援する看護職に必要な知識・技術の一定の質を保障するために、教育実態を明らかにしていくことが課題となる。

## O14-083

## 小児看護学臨地実習における見学実習が学生にもたらす学び

小村 未来<sup>1)</sup>、吉川由希子<sup>1)</sup>、横山 裕介<sup>1)</sup>、山谷 美里<sup>2)</sup><sup>1)</sup>金沢医科大学 看護学部、<sup>2)</sup>金沢医科大学病院 看護部

【はじめに】わが国では、病気や医療的ケアをもちながら地域で生活をする子どもが増加している。A大学看護学部の小児看護学臨地実習では、以前より新生児集中治療センターの見学実習は行っていたが、健康課題を抱えながら社会生活を送る子どもと家族の生活支援と看護師の役割を学ぶため、2024年度から新たに小児科外来、小児外科外来、ゲノム医療センターでの見学実習を追加して行っている。今回、見学実習の実際と学生の学びについて報告する。【実習概要】同実習は第3学年に行われ1グループ6～8名で構成されている。1クール10日間で、5日間を病棟実習、3日間を見学実習、2日間を学内実習で展開している。見学実習は新生児集中治療センター、小児科・小児外科のいずれかの外来、ゲノム医療センターではダウン症候群の赤ちゃん体操教室を実習場所としている。【分析】成績確定後、今年度の実習の内容を整理し、学びは見学実習毎の課題レポートから拾い出し分析した。【結果・考察】A大学病院は小児高度外科医療センターを有しており、新生児集中治療センターにおいても、出生後まもなく緊急手術を受け全身管理中の乳児、手術待機中の乳児、超・極低出生体重児、など多様な状態の患児が入院している。その中で、看護師による日常生活ケアや家族支援の場面を見学し「離れて過ごす母親には少しの変化でも伝えることが大切だった」と等の学びがみられた。小児科・小児外科外来では、学生一名が一組の患児・家族の受診行動に付き添い、内分泌疾患の自己注射指導の見学や術後経過の診察への同席、採血や画像検査、入院センターでの入院手続きなどに同行した。実際の一連の受診行動を患児とともに経験することで「外来受診にくる子どもと親の想いは様々であるとわかった」などの学びがみられた。ゲノム医療センターでは、実習指導者が赤ちゃん体操指導員の資格を有しダウン症候群の乳幼児に対して赤ちゃん体操を行っており、学生の約半数は実際の教室を見学することができた。「赤ちゃん体操の場は体操やマッサージで刺激を与えるだけでなく、母親の相談の場や、ダウン症の子をもつ母親同士をつなぐ場もある」などの学びがみられた。小児病棟以外の場を増やすことで、学生の視野が広がったと考えられる。